

平成28年度
教育改革 ICT 戦略大会の開催概要

1. 日時 : 平成28年9月6日(火)～8日(木)
会場 : アルカディア市ヶ谷(東京、私学会館)
2. 開催テーマ: 「教育の質的転換に向けた内部質保証を考える」
3. 参加者数 : 312名(155大学、13短大、賛助会員13社) [昨年度452名]
4. 大会の目的
大学教育の質的転換に向けて、社会及び世界から信頼される人材育成の内部質保証のあり方について、三つのポリシーの一貫性、整合性の面から探求するため、以下の全体会、テーマ別自由討議を展開した。
5. 全体会で確認された主要な点
 - ① 3ポリシー省令化による内部質保証の課題は、形としての3ポリシーはできているが、実際に3ポリシーがそれぞれどのように関連づけられているか明確でなく、教育の質的転換に向けて教員一人ひとりが理解し、教学マネジメントに関わるようにすることが問われてくる。
 - ② 学修成果の可視化、カリキュラムの質保証、卒業認定の説明責任を達成する今日的課題に対応するため、eポートフォリオを活用して学生自身、教職員、社会に対して学修成果をより見えるようにする仕組みを構築し、さらにIRなどの活動を通じて仕組みを洗練させていく取り組みを目指している。学生の自己評価を可視化の軸に据えるため、学修成果指標の達成度を評価する学生の自己評価基準としてコモンルーブリックを策定し、「エビデンスベースの自己評価システム」を用いて多角的に評価できるようにしている。
 - ③ アクティブラーニングが失敗した例としては、学びが能動的でない、学びがない、教員が近視眼的になり、将来構想力が欠如していること。アクティブラーニング環境の構築としては、価値観、関係者、教育体制、教育技術が整うことが理想である。
 - ④ ネット会議による分野横断型PBL教育の提案として、医療人として患者中心の医療を進めるには多面的視点から問題を整理し、多職種の見点を組み合わせる中で最適な解決方法を合理的に見出すクリティカル・シンキングによるチーム学修が重要となる。例えば、ICTを活用したPBLで多分野有識者の意見集約してチームとしての提案を作成する分野横断型PBL体験などが考えられる。
6. テーマ別自由討議で確認された主要な点
 - ① ICTを活用したアクティブラーニングの取り組みと課題では、文系の大規模授業において市販の学修管理システムを活用して事前・事後課題の学修に反転授業を実施する方法や、スマートデバイスを活用してリアルタイムで受講データを収集・活用し、グループなどによる協調的な演習を実施している。
 - ② IR導入の背景は、教育・学修行動の把握、組織の意思決定支援、政府・社会の説明責任情報の提供を行うために体系的なデータが求められる。IRの機能としては、どれだけの授業数がどのレベルで必要か、人件費が教育資源としてどのように使われているかなど教務データなどとしての情報収集と、学修行動の分析、他大学とのベンチマーキングの整理・体系化・分析及び認証評価への対応、経営判断の報告書作成など学内外へのフィードバックがある。課題としては、問題認識がないと機能しない、縦割り思考を見直すことが重要、学内の組織と連携してバーチャルなIR組織を作ることも可能、誰がIRを担うかなど課題が山積している。IR活動の事例として、早期退学者の防止対策、寄り添う教育・鍛える教育を実現するための授業改革の点検などがあり、今後の展望として、エンロールマネジメントの実現を支えるIR、教育の質を担保するIR、経営戦略に寄与するIRを目指している。
 - ③ 客観的な評価が難しいコンピテンシーの評価に対し、アセスメント科目を設定しルーブリックに基づく相互評価や自己成長の確認の例とスモールグループディスカッションやチームベースドラッシングでのピア評価の例が発表された。アクティブラーニングでどのような能力が付いたか自覚させ、ディプロマポリシーに結びつけるルーブリック評価と回数を重ねるごとに信頼度を増し、学生も評価者として成長でき、教員評価とあわせることで科目評価に耐えうるものになっていく。
 - ④ 「価値の創出を目指した問題発見・解決思考の情報リテラシー教育のモデル」では、委員会の提案について多くの賛同を受けたことから、教育モデルの推進に向けて授業方略、教材開発、授業評価、指導方法などについて検討を続け、開発・普及していくことの必要性が確認された。